

## 企業

地域の成り立ちや生活のあり方を  
真剣に考え直すべき

盛岡市

大立目 勇次 株式会社岩手暖炉

取材日 2013.10.22

株式会社岩手暖炉は1982年創業。数多くのメーカーの暖炉、薪ストーブを取り扱う。また、山や林業に対する問題意識から、2000年より盛岡市近郊の薪を焚くことが大好きな仲間達と「もりおか薪割りクラブ」の活動を行ない、薪ストーブを購入した人達に、薪を作り、薪ストーブに関する情報交換ができる仲間と出会う場の提供をしている。

## 薪ストーブとの出会い

父親の仕事を継いで、主に林業関係の機械を販売する仕事をしていた。1979年、第二次オイルショックの影響で石油が高騰した際に、お付き合いのあった林業機械の輸入元が「日本は豊かな森林があるので、海外の高性能の薪ストーブはビジネスチャンスではないか」とデンマークから輸入したのが、私が薪ストーブに出会ったきっかけだった。その頃はリゾート地での需要も大きく、しゃれた別荘などに暖炉や薪ストーブが設置されていた。

最初に薪ストーブと聞いた時は、ホームセンターなどに行けば3000円で買える時代なのに、なぜわざわざ海外から高いストーブを輸入するのか疑問に思った。しかし、実際に見てみると非常にデザインが良く惹かれたので、自分の事務所で使う事にした。火を焚いてストーブにあたると、とても心地が良く「これほど良い物なら分かってくれる人もいるかもしれない」と思い、約30年前から仕事として取り組み始めた。

## 3月11日 14時46分

平泉バイパス北口交差点の赤信号で停車している時に地震が来た。「30秒もたてば止まるだろうな」と思ったが、いつまでたっても止まらない。正確な時間は分からなかったが、地震とはこれほど長く続くものなのだろうか。すぐに尋常ではないと感じた。車体が大きく揺れるので船に乗っている感覚で、誰も車からは降りられない様子だ。信号機や電柱もぐらぐら揺れていた。これほど大きな地震で建物は倒壊しないのか、自宅や事務所は無事なのだろうかと不安が募った。

地震が落ち着き、すぐに信号機は停電した。帰宅する事を決め、一ノ関にある自宅へ向かった。幸い道路の陥没などはなく、普段通る道路を通って帰る事ができた。家では家族が私の帰りを待っていた。電気は3~4日間は止まったが、水道は止まらず、都市ガスもすぐに復旧した。電源に頼ら



ない薪ストーブを日頃から使っているので、暖房の心配はなかった。燃料も前日に薪を調達していたので十分にストックがあった。さらに、米や乾麺など食料の備蓄もあったため、2週間は生きていけるだろうと思った。携帯電話は使える地域と使えない地域があったが、固定電話は使えたので昔の物の強さを感じた。

家族の無事を確認した後、近隣を回って建物の倒壊やけが人がいないかを確認した。停電で暖房の無いお宅が多かったので、「よろしければ、うちに薪ストーブがあるので来てくださいね」と声をかけた。結果的に地域の方々は遠慮して来なかったが、停電が長期化し、もっと寒い時期で毛布にくるまっているだけでは凌げない寒さだったら、地域の方々が集まれる暖かい場が必要だと思った。

ほとんどの大型スーパーマーケットは閉店した。天井が落ちたり、ガラスが割れたり建物の被害が大きいため従業員やお客様の安全を確保するためだ。一方、昔ながらの個人商店や地元スーパーマーケットは営業していた。店舗の外で販売するお店もあり、食料や電池を買うために行列ができた。地震から1週間が経過し、盛岡市内にある事務所へ来たところ、ロッカーやストーブが倒れてひどい状況だった。この頃からだんだんと食料の流通が回り始めたと思う。

## せめて少しでも力になりたい

次の日、情報を得るために訪れた避難所でテレビや新聞を見て、津波被害の大きさを知った。津波が起きた事はラジオで聞いていたが、まさかこれほどの被害があったとは想像ができなかった。衝撃的だった。

2週間後、お客様に会いに大船渡市赤崎町へ行った。幸いな事にお客様は全員無事だった。一関市大東地域から陸前高田市の矢作町を通ったところ、矢作町でも津波の被害があり、大変驚いた。矢作町は内陸地域なので何事もないと思っていたからだ。それから気仙川沿いに進み、広田町を抜けて大船渡の日頃市町へ行き、さらに海に近い赤崎町のお客様に会いに行った。道路沿いに瓦礫がたくさん積み、壊滅的な状況だ。新聞やテレビでは見たけれど、内陸と沿岸部の被害の差がありすぎてもどかしさを感じた。しかし、自衛隊が復旧したのだろう、すでに道路の瓦礫は片づけられ、主要な道路は走る事ができた。

赤崎町のお客様ご自身は地震の時、盛岡にいたためなかなか大船渡に帰れなかったそうだ。お客様のご家族は津波が来た時、すぐ近くの山に逃げて助かり、お宅1階の天井まで津波が来たものの建物は残った。せめて少しでも力になりたいと思い、まだ食料が手に入りにくかったので、大東地域の福祉施設のパン工房で買えるだけ買ったパンと電池をお渡しした。

同級生にも会えた。話を聞くと、自宅は津波の被害を受けなかったが、食料が手に入らず大変だったようだ。その後、広田町のお客様に会いに行った。その地域の住宅も1階部分は津波の被害を受けていた。避難所に指定されている高台のお寺に行ってみると、消防団の関係のお客様は出かけていたのだが、無事である事が分かった。また、陸前高田市内に4~5軒はお客様がいたので中心部へ行ってみると、大変な惨状を目の当たりにした。何かしてあげたい気持ちはあっても、同じ県にいるのに何もできず、もどかしさを感じた。

## 震災を経て、薪ストーブに対する認識の変化

震災以前、薪ストーブは暖房機なのに嗜好性の強い物だった。火の暖かさや木の温もりを知っている方々が好きで使っていた。しかし震災による長期の停電を経験して、人々の自然エネルギーや蓄電に関する関心や意識は変わった。新築などで薪ストーブを設置できる条件にある方は設置しようと意識が高くなったと感じる。震災以前は電気や石油が無くなる事を考えていなかった。シンプルでかつ昔からあるものは非常時にも対応できる強

さを持っている。すべてをデジタル、ハイテクにする事は危ないと感じた。

## 林業と薪供給における課題

薪ストーブの全体の需要は上がっている。ホームセンターなどで購入できるし、個人で輸入している方もいる。岩手県内で2軒しかなかった販売店は、ここ数年で12~13軒に増えた。環境問題に対する認識から取り組む時代になり、注目されるようになった。薪ストーブが木質バイオマス、自然エネルギーなどの環境問題に関する認識に変化したのは7~8年ほど前からだ。本来は自分で薪の調達をできる人が薪ストーブを購入すべきなのだろうが、利用している人達にとって薪の調達は大きな課題である。

岩手県は全国一の薪や炭の生産地だ。かつての生活は薪と炭のエネルギーが中心だった。それが、戦後の高度成長の過程でエネルギーの転換がなされ、さまざまな物が安く便利に移り変わる中で、薪が流通しなくなってしまった。かつては林業の盛んだった岩手県でも林業分野で抱える課題は大きく、薪の供給における現実是非常に厳しい。

## 暖かく過ごす冬を想像しながら

「もりおか薪割りクラブ」は岩手県盛岡市近郊の火を焚く事が好きな仲間によって始められたローカルなネットワークだ。

うちのお客様が県の林業技術センターのホームページで「薪割りクラブ」の項目を見つけた。薪の利用について、薪割りクラブの構想が書いてあるページだった。そのホームページを見て、私は担当者の深澤光さんに直接会いに行った。その後、意見交換や薪割りのPRイベントを行ない、山や林業の現状に対する活動を一緒に模索した。

「もりおか薪割りクラブ」の活動が始まったのは2000年の事だ。木や山に対する認識を見つめ直してほしい思いがあった。山がこれだけ自分達の近くにあるのに、誰もが関係ないかのように生きている。お金を出せば薪は買えるけれど、自分で薪を作る事で木や山は大事だと感じて欲しいと考えた。購入側は「高い」と感じるが、いざ薪を作って売る側から労働力やかけた時間を考えるととても単価が安い。林業への理解や薪を作る大変さを体験し、薪ストーブを買ったところから、さらに踏み込んでほしい。ある程度意識をお持ちで、市内にお住まいで薪を作る事ができる条件のない方に活動の声がけをしている。

活動は毎年5月頃からスタートする。年10回ほど土曜か日曜に集まって、薪の共同製作をしている。1回の活動に参加するのは約10人だ。普段

は体を動かす仕事をしていないと、なおさら作業が楽しい。当然、最初は斧もチェーンソーも使えないが、だんだんと覚えていく。大変な作業だが、冬の生活の楽しさを知っているのが、薪ストーブで暖かく過ごす冬を想像しながら薪を作る。作った薪は1つひとつに思い出があり、なかなか割れなくて何度も挑戦した木だと、使う時に思い出す。安いかもしれないが、ホームセンターで売っている薪には作る人の愛情を感じない。使う人の顔が見えないので、ただ物を使う感覚なのかもしれない。作業だけではなく皆でお茶を飲み、コミュニケーション、情報交換をする。自分で作った薪は絶対に無駄使いできない。その薪で冬を過ごすのは特別な事だと思う。

薪を作るグループはたくさんある。考え方はそれぞれ微妙に違うようだ。「もりおか薪割りクラブ」は組織を大きくしないように、お昼に話せる人数での活動を目指している。名前に「もりおか」と付けたのも、そうした意味が込められている。そうした小さなグループが地域のあちこちできると良いと思う。

## 大震災を振り返って

岩手県は首都圏に頼りすぎていると感じる。物の流れはすべて1か所でコントロールされ、郊外には大型スーパーマーケットが店舗を構えている。商品は安いだろうが、無駄に多くの量を買わなければならない事も多い。また、コンビニエンスストアがあちこちにあり、いつでも買い物ができる。しかし、コンビニエンスストアにはストックヤードがないため、余った商品はすべて廃棄だ。1世代前まで、地域は地元の商店で成り立っていた。小さい頃から親しんでいる地元の商店はお店より広い倉庫があったし、必要な分だけを買えた。当時のスタイルだったら、東日本大震災でも地域はそれほどのパニックにはならなかったと思う。岩手だけでなくすべてがグローバリズムに頼りすぎている現状があると思う。ローカリズムがきちんと成立した上で成り立つのがグローバリズムではないだろうか。

大震災を通して、災害時には水と暖房が大事だと感じた。お米はなくても、水さえあれば10日は生きられる。災害は突然やってくるのだ。朝、「行きます」と家を出て家族の元に必ず帰れる保証はどこにもない。食べ物、水、安全は自分で確保しなければならないし、岩手は冬が長く暖房を半年間使用するのだから、暖房についても備えるべきだ。日々目の前の事をきちんと行ないながらも、これらは常に考えなければならない事だ。震災直後は電話が復旧したら、修繕依頼に追われると思ったのだが、意外に少なかった。シンプルな薪ストー

ブほど修繕は簡単であり、シンプルなのは緊急時にも対応できる強さを持っていると感じた。それに、さまざまな地震を経験し、薪ストーブ自体や設置の強度が上がっているのだと思った。

現在、関東圏でも薪ストーブの需要は大きい。しかし、薪ストーブを使える条件を持つ人達が使うべきではないだろうか。岩手県でも薪の安定供給は大きな課題なのに、関東圏に出荷されている。米は毎年収穫できるが、木は育つまでに10年も20年もかかる。岩手県の資源を簡単に外に出す事についてはよく考えなければならないと思う。岩手県は山や木が豊富にあるので、災害時の備えとしても薪ストーブは有効だ。それは岩手県の地域性だろう。都市には都市に合った備えがあると思う。

震災後、全国からボランティアがたくさん来てくれた。大変ありがたいことだが、少し疑問を感じた。かつての地域は「結」の文化で成り立っていたからだ。隣の家が困っていたら手伝う、集落同士で祭りの手伝いを行なう。それが結文化だ。あれだけ大きな震災だったので、本当に困った時は必要かもしれない。けれども時間が経ち、ボランティアに頼らずに自分達でやらなければならない時期が来ると思う。震災後、地域を出た人は多く、新しい人が入ってくる事はほとんどない中で、復興できるのか正直不安は大きい。仕事が無いと人は離れてしまうので、岩手県に縁のある経営者が岩手に事務所を構えるくらいの考え方がなければ復興できないと思う。その地域にはその地域の生き方がある。大震災を通して、岩手県、日本の地域の成り立ちや自分達の生活のあり方について、真剣に考え直すべきだと感じている。



暖かく過ごす冬を想像しながら、薪を共同で製作